

漆黒の闇

成平なりひら 一平太いちべいた

漆黒の闇とはまさにこのことだろうと滝本裕司は冷静に分析しながらも心のどこかで怯えていた。

幾度となく瞬きをしても目の前に何かが現れるでもなく何も見えない。首を幾度も左右に振り、目の前に手をかざしても自分の指さえ認識することはできない。風もなく音も匂いさえもない。心臓の音だけが、とてつもなく早く打ち、鼓膜を激しく揺らす。裕司は自分の存在を確かめるかのように両手のひらを頬に当て、下へとずらしながら全身をまさぐるかのように撫ぜた。べっとり汗ばむ躰。どうやら何一つ衣服を身に着けてはいない。足の裏からは生暖かいゴム板のような感触が伝わってくる。おれは恐る恐る膝をつき手のひらで床を探ってみた。何も無い、真つ平らな床。屈んだまま一步、二歩と前に進んでみた。三歩目に出した手が着くはずの位置に床が無い。俺の上半身はつんのめるかのように穴の中に落ちそうになるのをすんでのとこで堪

えた。どれほどの大きさでどれほどの深さがあるのか探る勇氣もなく落ちかけた手を上に引きもどそうと思つた瞬間、何かがおれの手首をつかんだ。いや、巻きついてきた。穴の中に引きずり込まれると思う恐怖心が必死に抵抗する。俺はやつとの思いで難を逃れた。

「おれは今どこにいるんだ。この闇の中で何をしているんだ。どうしてここにいるんだ」

誰に向けるでもなく腹の底から大声で叫んだ。もつとも恐ろしさのあまり声はかすれ上ずっている。いや、外に向かつて発しているつもりがおれがなっているだけかもしれない。この闇に落ちるようになってすでに一年近くなる。初めての夜は恐怖におののき、震える躰は激しい音を立て、辺りを見回すとさえできず目を堅く閉じ、頭を抱え、その場にうづくまることしかできなかつた。だれかに助けを求めようにも声さえでない。とてつもなく大きな魔物が今にも襲ってくるかのような恐怖。鋭い爪で体中が一瞬にしてバラバラにされてしまうのではないのか。耳まで裂けた大きな口。無数にならんだ鋭い歯。目が識別するのではない。脳が識別している。体中から吹き出す汗が粘りを増しながらまとわり

つく。

「グアー」

今までに聞いたこともないような鳴き声。とてつもなく大きな声。獣が獲物を襲う際に放つ威嚇の雄叫び。おれは逃げることもできずうずくまるしかない。いや、そんな動きさえも封じるかのような波動が躰全体を抑え込んだ。その瞬間、これまでに見たこともないような稲光が漆黒の闇を切り裂き、見覚えのある幾つもの顔を一瞬ではあつたが浮かび上がらせた。そしてこの闇に落ちるたびにその数は増えていく。おれは覚悟を決めたかのように目を見開き稲光した方角に仁王立ちになる。今さら引き返すことはできない。おれを罰するならばそうすればいい。漆黒の闇に閉じ込めたいのならそうすればいい。おれが間違っているのか世の中が間違っているのかそんなことはどうでもいい。おれはおれが思ったように行動する。無理に生かさねながら死を待つだけの人とこれから生きなければならぬ縁者と天秤に掛ければおのずと答えは出る。血のつながりが濃密であればあるほど出すことのできない答えが。

おれに家族はもういない。血のつながった縁者も

いない。おれがどうなろうと気に掛ける者はだれもいない。

三十年も前におれの両親は強盗に殺された。強盗ともみ合う父と母の悲鳴におのき、強盗は何も取らずに闇に紛れて逃げ出した。何事が起きたのかと階下に降りたおれも妹も両親の無残な姿に足がすくんだ。今でもあの時の真つ赤な光景が脳裏に焼き付いている。あと半年余りで高校を卒業するという時だった。身寄りもなく両親が残してくれた家と少しばかりの蓄えに加えて不慮の事故として受け取ることができた生命保険金は、生活に困ることなく二つ年下の妹と共に大学に進むことが容易なくらいの金額ではあつた。

犯人は一か月もしないうちに逮捕された。

神崎貞夫、奴の名前と顔を忘れることはない。一年近くを掛けて一審、二審と裁判は進んだ。その都度おれは傍聴席の一番前に陣取った。神崎への憎悪のありつたけを視線に乗せて被告席に投げるために。細い目は吊り上り、えらが大きく張り出た色黒の神崎に無期懲役刑が言い渡された。

悲劇の遺児としておれたち兄妹はマスコミに追いかけられた。顔こそはモザイクが入るものの何度

も同じ質問を受けた。同情とあわれみをこれでもかというほどに口にはするが、茶の間への貢ぎ物としてかっこうの具材ではないことは容易にわかる。いい加減なコメントイターが煮詰まった鍋をつつくかのように箸をのぼし、あれやこれやと好き勝手に放つ。当然のように近所はもとより学校でも話題の的だ。おれも妹もじつとそれに耐えるしかない。哀しさ寂しさに加え一変した生活と犯人への憎しみ。ストレスは幾重にもなっておれたち兄妹にのしかかってくる。そんな中で俺は高校を卒業し職に就いた。妹に大学を卒業させるためにも親が残した金だけを充てにすることなく地に付いた生活にしたいと考へてのことだった。幸いにして大きな病院の事務職に就くことができた。療養型ではあるが三百を超える病床を抱えている。高卒の給与なんてたかが知れているかもしれないが、貯金を切崩すだけの生活からの脱却はできた。

終わった。これでマスコミに追われることもない。平穩な生活を取り戻すことに専念できる。

しかし、兄妹二人の平穩な生活は五年と続かなかつた。大学卒業を控へ、就活にせわしなく動き回る妹が先行きを悲觀して命を絶つてしまった。国立大

学を首席で通した妹ではあったが希望する企業には面接を受けれど内定を取ることはできなかった。「ご両親共に存命ではないのですね。そうですね、お兄さんと二人の生活が七年ほども……。大変だったでしょう」

面接担当者が口にした同情的な言葉は同時に不適格の烙印とも取れるものだった。妹の心は二十社程の面接の末に折れてしまった。忘れていたおれの脳裏にあのえらの張った男の顔が再び浮かんだ。と同時に手錠に繋がれた神崎貞夫への憎悪の念がわき上がってきたのを覚えている。だからといって何ができるわけではない。あいては高い塀の中に繋がれている。それも一生出てくることはない。無期刑なのだ。それでもあの悲惨な事件以来おれたち兄妹は世間の同情と好機の目にさらされながらも寄り添って懸命に生きてきた。いや、そう思っていたのは私たち兄妹だけだったことが妹の就活をとおして思い知らされた。正常な家庭に比して欠如した家庭。人間形成過程において何らかの悪影響を高精度で受けているであろうとの偏見が危険分子の事前排除の方程式へとつながっていることが容易に理解できた。

滝本裕司を医療営繕係長に任命する。高校を卒業して三十年、ただひたすら真面目にやってきた。前任者の定年退職によるところてんとも揶揄される人事だった。もともと営繕課の構成員は五人しかない。それも他の部署から使えないと烙印を押された者の集まりだった。その理由もさまざまだった。事務的なミスに始まって患者家族とのトラブルを引き起こしたことが上司のダメ出しにつながった者。おれの場合は反抗的だとの理由らしい。どこの部署であろうが、おれはおれの意見を述べてきた。だからといって上司の決定に逆らったことはない。どうやら、何も言わずただ黙って指示に従えということらしい。

ここに若くして廻された職員は定年を待たずに辞表を書いてやめて行く。病院職員のだれもが営繕係りを小間使いのように扱うからだ。

「営繕さん、椅子がガタガタいうのよ。なんとかしてくれない」

聞き覚えのある声だった。受話器の向こうのナースの顔が浮かんだ。三十過ぎの目の大きな美人顔だが、それを鼻にかけている嫌味なナースだ。受話器を取った成り行きでおれがすぐさま出向くしかな

い。問題のイスを見てみると何のことはない、座を止めているネジが緩んでいるだけだった。電話をしてきたナースが手持無沙のように聴診器をいじりながら俺の背中越しに様子を見ている。

「これで大丈夫。ネジが緩んでいただけです」

「そうなの、どうも・・・」

ナースはめんどくさそうに口を開き、何事も無かったかのように仕事をはじめた。おれの奥歯が強く噛みしめられ、目に力が入っていく。

「何なんだ、こいつは？　ありがとーの一言も言えないのか。これくらい自分でやれるだろう。だからいつも彼氏に逃げられるんだ」

やっとの思いで堪えながらこのナースを哀れんだ。こんなレベルのナースばかりではないが多くのナースやヘルパーが雑用を押し付けてくる。それもあるかに年下の女たちに使われては嫌になる。営繕課に異動と同時に名前と呼ばれることもなくなる。

「営繕さん」としか呼ばないのだ。自尊心も仕事に対するモチベーションも日毎に崩れて行くのをいやがおうにでも実感させられる毎日が続く。課長は総務課から移って五年になる。定年まで二年を残し、やめるにやめられないで居るだけだった。おれは、

高校を卒業して総務課、医療事務課、地域課、経理課、資材課と病院経営のなんたるかを目の当たりにしてきた。きつとここで定年までの残り十年以上を粘ってやって行くのかもしれない。

「滝本君、明日の昼過ぎに西病棟に生保さんが来るからよろしく」

毎日のように誰かが死に、そして待っていたかのように空いたベッドを埋める患者が入院してくる。まるで工場のライン作業かと思えるほどに次から次へと途切れることなく入れかわって行く。ドクターもナースもヘルパーも感情移入することなく目の前の患者を生き長らえさせるための手を施す。いや、直接医療に携わる者だけではなくこの病院から糧を得ている者すべてがそうなのかもしれない。

昭和の時代であれば動けなくなつた老人の命はそんなに長くはない。食が細り最後にはリングゴをすりおろし、スプーンでわずかに開く口の中に流し込みながら家族は最期を看取つた。ここでは鼻から管を入れ液体の栄養剤を流し込む。胃ろうを施された老人も横たわる。本人の意思など入り込む余地はない。手を掛ければ掛けるほどに物言わぬ老人の命は長らえ病院の収入が上がる。成果と呼ぶならば十

年を超える老人さえも存在している。

「生保さん」と呼ばれる生活保護を受けている患者は病院にとつてもっとも扱いやすいお客さんだった。見舞いに来る家族もない。患者本人は口もさけずベッドに横たわるだけ。どのような治療や介護であろうが誰も気には掛けない。役所の担当者も職務として定期的な様子を伺いには来るが事務的でしかない。まるで旅立つその日がいつなのかを探りに来ているだけといつても過言ではないのかもしれない。

おれは、明日入院してくる患者の資料を受け取り病室へと向かった。昨日旅立つた患者のベッドは去年の予算で購入した真新しい物だった。ベッドを旧式の物と入れ替えなければならぬ。家族のいる患者のベッドはできる限り新しいものを使用する。病院生活の印象を少しでも上げるために頭床台を始めとするこまごまとした備品にさえ気を遣う。しかし、生保さんには正反対の準備を行う。経費を抑えるために廃棄寸前の物品を揃えることさえある。

備品の新旧によって医療費に差があるわけではない。支払いでもめることもない。ましてや高額な治療費が払えなくなつたと焦げ付く心配もない。生

保さんは上客なのだ。だからこそ、減価償却期間が過ぎたような備品ではあってもなんら問題がおきる心配はない。

おれは、バインダーを片手にエレベーターで三階に上がり北病棟へと向かった。歩きながら何気なくバインダーに目を落とした。その瞬間、全身が凍りつき電気ショックにも似た震えが軀を走り抜けた。

「神崎貞夫」忘れることのできない名前だった。憎んでも憎み切れない名前でもあった。まさかと思いつきながら生年月日を確認した。間違いはない。両親を無残な姿に変え、おれたち兄妹の人生を狂わしたうえに、妹を死へとつなげたあの男だった。無期刑の神崎がなぜここに入院してくる？ 頭の中によみがえる憎しみと疑問符が渦巻いた。

翌朝、隣の役所の車に乗せられて神崎が入院してきた。間違いない。痩せこけてはいるが浅黒くえらの張ったこの男の顔を忘れたことはない。車いすに乗ってはいれるものの自分の力で動かすことはできなさそうである。全身が麻痺状態のようでもある。ナースとヘルパーが二人係でベッドへと寝かす。担当ドクターが隣町にあるR病院から廻されたカルテの写しに目を通しながら形式的な診察を行う。付

き添ってきた職員と看護主任とは顔なじみのようだ。北病棟の半分以上は近隣の町からやってきた「生保さん」でありそのうちの何人かはこの福祉課の職員の担当患者だった。

「脑梗塞を患ったの。独り暮らしで発見が遅れ、生きてるのが不思議なくらい。それにアルツでもあるわ」

職員が看護主任に耳打ちしているのが漏れてきた。

カルテに書かれた内容を見たいと思うがさすがにそれはかなわない。ナース室のガラス棚庫に保管され、常に誰かが椅子に座っている。それでもこの病院に三十年も勤めれば患者の大体の様子は診てとれる。どうやら意識はそれなりにあるものの食事を取れる状態にはない。栄養剤が鼻から注入されている。自身の力で寝返りを打つこともできなさそう。時折うめき声をあげてはいるが何を言っているのか聞き取ることができない。法を犯した者の哀れな末路である。しかし生きているのも事実だ。

自由を拘束されている刑務所ではあるかもしれないが公費で生き、出所してからは生活保護の名の下で公費で生計を立て、脑梗塞を患ってもこうして

病院生活を何ら金銭的な心配をする必要もなくベッドに安住している。おれは理不尽さを感じずにはいられなかった。

毎月の病院の支払いに四苦八苦している患者の家族も多い。患者本人の年金だけではまかいきれない現実がある。自分の食を切り詰め、やっとの思いで月末を迎える。そんな親族をおれは、これまでに何人も見てきた。患者の家族たちがぐつろぐ談話室の片隅で途方に暮れている家族をだ。自販機に手を伸ばすことなく病院側によって設置されたミネラルウォーターの紙コップを引き出し、口に運んでほため息をつく。患者が息を引き取る。と、同時に悲しみの涙の下に解放された安堵の思いを浮かべる家族を何度も見てきた。娯楽など縁の無い生活をさらに切り詰め、患者の入院費を工面してきた家族。こうした家族にとっては、医学の進歩は必ずしも幸福をもたらすものではなかったのかもしれない。

「この男のどこに生きている価値があるのだ」

病室の入り口から中の様子を伺い観ながら俺は心の中でつぶやいた。と同時に復讐心がわき上がってくるのを抑えることはできなかった。

事務所に戻ると早々にパソコンに向かった。

「無期刑における刑期短縮」

死ぬまで保護観察は付くものの模範囚であれば早ければ二十五年ほどで仮釈放が認められるとパソコンが教えてくれた。やつの刑期が確定して三十年以上の時が流れている。やつが目の前に横たわっていても何ら不思議ではない。以来おれは悶々とした日々を送った。

そんな時に隣県で大きな事件が起きた。わずか二か月で五十人の老人が死んだとのニュースが連日マスコミをにぎわした。輸液の中に消毒液を混入させたと報じられた。犯人はドクターかナース。いずれにしても病院関係者なのではとの憶測が飛び交った。

「これだ」

おれは昼食を終え、デスクでお茶を飲みながら週刊誌の記事に思わず口走ってしまった。

「滝本君、昼休みが終わったら医局の湯沸かし器を見てきてくれないか？ 手に負えないようなら業者に依頼してかまわないから」

どうやら課長の耳には届かなかったようだ。

「滝本君、何か面白い記事でも載っているのかね？」
「いや、難解なパスワードがやっとなら解けたのでつ

い・・・すみません大きな声で」

嫌味なやつだ。聞こえていたのなら間を置かずに言えよと思いつきながらとっさに取り繕った。

医局のドアを開けると、中央に置かれたソファでドクターたちが雑談をしていた。昼からの回診にはまだ間があるようだ。もつともこの病院では患者を診て廻るのではなくナースセンターに赴き、患者一人一人の看護日誌に目を通すのが仕事となっている。日誌をもとに看護主任から患者の様子を聞き取り、留意点を指示をする。問題がありそうな患者については直接回診はするものの診察をするというよりは覗き込むといった感じにしかおれにはみえない。患者を細かく観察しているのはナースでありヘルパーなのだ。患者の日々の様子を日誌に細かく記録するシステムになっている。

「Y病院の事件、ついに起きたかって感じだね」

湯沸かし器の調子を確認しているおれの耳にドクターの会話が押し入ってきた。

「患者の回転率を上げれば病院は儲かる」

八十近くにはなろうかと思える頭の禿げあがった最長老のドクターがわかったように応える。

「最初の一年は割高な治療と検査漬がきくからな」

「家族はひよつとしたらと思うから喜んで承諾する」

「しかし、ここに来る患者は完治することを目的にはしていない。逝く日を待つだけ。我々は一日でも長らえさせることだけに気を配ればいい。家族はそれを願っている」

「ここを出るのは割安な特養に移るか、霊柩車に乗るかしかない」

この病院のドクターは、それなりに事情を抱えた者たちの集まりなのかもしれない。過去においてはドクターとして尊敬もされ輝いてもいたのかもしれない。しかしその輝きを今は見て取ることはできない。ドクターとしての威厳を放ってはいない。ドクター人生最後の職場として流れ着いたのがこの病院なのかもしれない。そんなドクターたちの会話からは患者自身の尊厳などは微塵も伝わってはいない。

「それにしてもこの事件、輸液に何を混入させたのかね」

「消毒液って記事には書いてありましたよ」

「なにもそんな足の付くようなものを入れなくても、何入れたって死につながる患者なのにな」

「おれなら、スポーツドリンクかな、少し塩を足して指でかき混ぜて一晩空気にさらしたやつ。抵抗力なんて残っていない。簡単なものさ」

「高濃度の塩分と雑菌・・・即効性はなくても確実だな」

「心不全、死亡診断書にはこう記載するしかない」
「Y病院の場合は短期間であまりにも多い患者が死んだ。それも特定の病棟で。これが半分だったら誰も疑問には思わなかっただろうに」

「犯人はだれだか・・・ちよつとやり過ぎたな」
ドクターたちの口は無責任さを放ちながら言葉を発し続ける。おれは湯沸かし器の調整をする振りをしてながら野次馬どもの井戸端会議のような会話を聞き耳を立てていた。

「すみません、調整しては見ましたがガス器具なので専門業者に至急見てもらおうことにします。今日一日はご不便を掛けますが・・・」

「ああ、いいよ。ガスで死んだんじゃシャレにならんからな。そうだろう、営繕さん」

その晩、おれは自販機でスポーツドリンクを買って自宅に持ち帰った。

あれから十日が過ぎた。修理後の湯沸かし器の様

子を確認するためにおれは医局を訪れた。

「先生、三〇五号室の神崎さんの様態が、チアノーゼが・・・」

ナースセンターからの呼び出しがおれの耳に漏れ聞こえてきた。ドクターのゆがむ顔が背中越しに見て取れた。患者が死にかけては病室に赴かないわけにはいかない。携帯電話を白衣のポケットに落とし込みながら三角コーナーに熱湯を注いだばかりのカップラーメンを捨てるとドクターは医局を出て行った。

ドクターたちの雑談を参考に、すきを見ながら三十三CCのスポーツドリンクに一つまみの塩と次亜塩素ナトリウムを一滴たらし三回。おれは、輸液袋に注射器で注入してきた。病室の外にまで聞こえるかと思うほどに高鳴る心臓と震える手を懸命に抑えながら。

「大丈夫。心配はない。事なかれ主義のドクターに疑問など浮ぶはずもない」

心の中で呟きながら、それとなくおれはドクターの後を追った。

「心不全。生保さんだったな。役所に連絡を入れて」
形式的に聴診器を胸に当て、瞳孔を確認するとド

クターの口調は事務的な響きを放つ。と同時に、ナースたちが神崎の躰からチューブを外し輸液袋とともにバケツの中に棄てられ、顔に白い布きれをかぶせる。

「シャツ、シャツ」

勢いよくカーテンが引かれる。ナースたちは「あとは役所の担当者を待つだけ」とばかりに病室を出て行く。職員の到着まで神崎はカーテンの個室の中に放置される。家族の到着を待つ遺体ならばナースの手によって死に化粧が施されるが神崎にはそれもない。

幸いにして何ら疑いをもたれることもなく死亡診断書が作成され役所の到着を待つだけとなった。おれは注射針の孔の空いた輸液袋を医療廃棄物のドラム缶に投げ入れ、胸をなでおろした。

事件以来、神崎は税金で命をつないできた。刑務所での二十五年、身寄りもなく七十歳を過ぎての出生は生活を維持する手段も無く、生活保護を頼る他に生きる道は無い。毎日の食費を切り詰めなければ工面できないほどの入院費も神崎は気にすることもなくベッドに横たわることができた。神崎一人にどれほどの税金が投入されたのだろうか。少なくとも

もその状態があと数年は続いたであろう。おれがしでかした行為は両親と妹の復讐であったと同時に、膨れ上がり続ける社会福祉費の減速に少しは役立てたに違いない。神崎が生き続ける価値は何ら無い。法律的な問題はあっても正義はおれにある。

「これでいいんだ。よくやった」

自分に言い聞かせるように小さな声で呟いて眠りに付いた。どれほどの時間が経ったのであろう。ふと目が覚めた。

「どうした？ なぜだ。なぜ何も見えない」

確かにおれの目は明いている。夢でもみているのか？ おれは恐る恐る手を伸ばし、辺りをまさぐってみると目覚まし時計に指先が触れた。両掌で形を確かめた。

「おれのだ。いつもおれを起こしてくれている青い時計だ」

時計を顔に近づけても色も外形も確認することはできない。文字盤も見えない。その瞬間おれは大きな恐怖に包まれ、脂汗が全身から吹き出るかのような思いがした。

「グワーツ」

得体のしれない魔物が突然大きな声を発した。そ

しておれは氣を失った。氣が付くとおれはベッドの下に潜り込み頭を抱え軀を丸めこんでいた。

「チャ、チャ、チャ」

クオーツの時を刻む音がおれの心を落ち着かせる。すでに七時を過ぎている。どうしたことか六時半に合せてあるにもかかわらず目覚まし時計が鳴らなかつた。俺は慌てて身支度を整え、パンをほおばりながら車のエンジンを駆けた。

それから毎日この闇がおれを襲うようになった。それでも、病院での業務は何事もなかつたかのように流れた。そして四日目に、医療廃棄物処理業者が点滴パックの回収を行つた。

「神崎貞夫はすでに茶毘に臥され無縁墓地にでも埋葬されたに違いない。注射針の穴が開いた点滴パックも業者によつて焼却される。もう心配は何もない」

おれは窓から処理業者のトラックを見送りながら声に出すことなくつぶやいた。その日の夜は漆黒の闇に落ちることなく深い眠りについた。

この病院では毎日、三病棟の内の誰かが旅に立つ。時には二人の場合もある。ただし、どこかの病棟に大きく偏ることはない。月に一人か二人ならば作為

的に旅立たせてもそれに気づくなどということは万に一つもない。小さくはあつても針孔という重大な異常に注意をはらせるほどの訓練など受けてはいない。苦情を口にするなど出来ようもない患者ばかりを相手に時の流れにのつていてただけの日々をおくるナースとヘルパーたちである。ましてやドクターが患者の様子を直接診てまわるなどという行為は皆無に近い。

いま、ここに横たわる患者たちに質問の意図が理解でき、考えることができるならばおれは問いたい。「あなたに三十分だけ若いころの肉体と知恵をあげましょう。あなたは三十分を何に使いますか？ただし、時間が過ぎると同時に再びこのベッドの上です。」

おれには自信がある。全員ではないかもしれないがほとんどの患者は高いビルの屋上か橋の上に行きたいと言うに違いない。そしてそれは、自分自身のためでもあり家族のためにもと答えるであろう。

患者の幼少期ならばこんなにも生きながらえることなく旅立てものが医療の発達とともにベッドに横たわるだけではあつても活き長らえされてしまう。そしてそれは時に十年を超えることさえあ

る。

「どんな状態でもいい。生きてさえいてくれれば」
夫婦、親子の情としてわからぬでもない。がしかし、患者自身は早く楽になりたいと思っているのではないだろうか？ そうであるならばそんな家族の思いほど罪深いことはないのかもしれない。

「ねえ、あなた。来月からどうするの？」

談話室の隅で、夫婦が疲れ切ったかのような表情でヒソヒソと話している。どうやら、夫が今月で定年を迎えるようだ。

「お義母さんの年金だけじゃ、ここの支払いはできないのよ。お母さんの貯金だつてとつくに底をついているし」

「悪いな、お袋のことでお前に苦労を掛けて」

「しょうがないわね。あなたもまだ若いんだし、のんびりしないで次の仕事を早く探してね。わたしもフルタイムのパートに切り替えるわ。子供たちも独立したし。なんとかなるわよ、二人だけの生活なんだから」

険悪そうなムードではあったが二人の顔に笑顔が戻っている。これまでも幾多の困難を乗り越えてきた夫婦に違いない。二人だけの平穏な時間。時

には小旅行をと思う時もあるかもしれない。が、もう暫くは我慢するほかに横たわる義母をみまもる手段はない。夫婦は寄り添いながら談話室を後にして行った。

「この家はまだ恵まれている。三人が生きて行く道を持つている」

おれはそう呟きながら二人を談話室の窓から見送った。

それから何日かしておれは夜勤のナースから緊急呼び出しの連絡を受けた。給湯室の水道のコックが外れたらしい。水が噴き出し大変なことになっている。元栓がどこにあるのかもわからず今はバスタオルを巻いて水が噴き出すのを押さええていると。元栓はシンクの下にあると電話で説明したものの気が動転しているのか、至急来てほしいと何度も繰り返すのみだった。テレビ電話での応対だったらきつとおれは噴き出していたに違いない。それほど慌てふためくナースの顔が見てとれる思いだった。

一時間も費やすことなく買い置きの新しい蛇口に取り換え、通用口を出ようとしたとき見覚えのある顔を見かけた。深夜の三時過ぎに見舞いでもなからうにと、怪しげな動きをしている男の様子を物陰

から伺った。ほかの病院と違って患者のベッド周りに金目の物はない。患者は小銭すら持つてはいない。使う術がない患者たちである。男は誰にも気づかれではないとばかりに通用口から病棟に入り、階段を一段づつ踏みしめるかのように音をこらしながら上がった。警備員も常駐してはいるが定期的な巡回時間以外は入り口のポジションから離れることはない。カメラの設置もなされてはいない。この病院での侵入は物音さえ立てなければいとも簡単にできる。夜勤当番のナースとヘルパーも各病棟に一人づつしかいない。目を盗み難なく病室へと男は侵入した。

「やはり」

おれは病室の入り口に貼られた名札を見て男の正体を確認できた。毎日自転車をこいで、隣町から一時間ほどを掛けてやってくる男だ。自分の父親なのであろう毎日のように見舞いに来ては患者の手や足をさすりながら涙声で話しかけているのを何度目にしていった。

「ハクシヨン」

おれはわざとらしく大きくしゃみを放つてみた。そして病室の男に声を掛けた。

「何かお忘れ物ですか？」

大きく首を振りながら何度も頭を下げ、男は病室を出て行った。俺がああ男の様子に不審を抱かなければベッドの老人の息は止まっていたに違いない。薄暗い病室ではあつても老人の顔にはああ男の涙がしたり落ちた跡が幾つも見えてとれた。

電車賃を惜しみ、ましてや自家用車など縁もなく、逼迫している状況は履いている靴からも一目瞭然とわかっていい。

「この男に患者以外の家族はいるのだろうか？」

これまでに、後ろ姿を見かけては何度もそんな思いを抱いてきた。

「営繕さん？ 大きなクシヤミの犯人は？」

「すみません、道具を一つ忘れたもので」

明らかに怪訝そうな雰囲気は白衣のポケットへの手の突っ込み方で判る。おれはナースに頭を下げて病棟を出た。

翌日、おれはああ男がやってくるのを待ち構えるかのように待った。間違いを犯すところをクシヤミに驚き、間一髪で我に返ったとはいえ再びそうした思いに陥らないとは限らない。そんなことにでもなつたらああ男の人生は何だったのか。何のために生

きてきたのか。マスコミの餌食となることが手に取るようにわかる。おれには他人事とは思えなかった。「キーシャリツ、キーシャリツ」

何かがこすれ合うかのような音を立てながら古ぼけた自転車音が聞こえてくる。

「来た」

おれはとつさに柱の陰に身を隠した。男はいつものように面会票に記入をして南棟へと向かった。

「こんにちわ、いつもお世話になっています」

男はナースセンターに声を掛けて病室へと入った。「おやじ、ごめんな。おれ、もつと頑張るから」

男は何度も何度も、涙声で詫びるかのように呟きながら患者の手足をさすっている。おれはホットした。もうこの男は今朝のようなことはしないだろう。それから数日してこの男の父親は他界した。と同時におれは漆黒の闇に再び落ちるようになった。

了